

1 学校教育目標

- つよく 心身ともに健康で勤労と責任を重んずる子供
- かしこく 自主的・意欲的に学習し創造性豊かな子供
- あたたかく 人間性豊かで人権を尊重する子供

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	○児童一人一人の学力向上を実現する学校 ○当たり前前を当たり前前のできる学校 ○地域のために貢献できる学校
○児童・生徒像	○基礎・基本をしっかり身に付け 自らめあてをもって 意欲的に学習に取り組む児童 ○自分に自信をもち 情操の豊かな児童 ○心身ともに健康で のびのびと活動する児童 ○きまりを守り 友達を大切にする児童
○教師像	○信頼し合い 認め合い 協力し合って指導に取り組む教師 ○教師力向上のために 絶え間なく努力する教師 ○児童一人一人を大切にし 確かな人権感覚を身に付けた教師 ○保護者や地域のニーズに敏感に対応し 三者連携のために努力を惜しまない教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

○基礎学力」の確実な定着と「思考力・判断力・表現力」の向上

7月に実施した区学力調査問題を活用した前年度定着度確認テストで、各学年の平均正答率は、区の目標値をすべての学年で上回った。通過率は、国語88%、算数88%で目標を上回った。しかしながら、2月末の定着度確認テストでは、国語80%、算数86%で、国語が目標を下回った。その後の補充指導で確実に定着が図れたか、SP表の活用によりフォローしていく。ノート指導の徹底を継続するとともに、自主性を育む自主学習ノートの取り組み向上について方策を検討する。日常化してきた詩や百人一首の暗誦、芭蕉タイムでの俳句作りなどを継続し、「言葉で考える力」、「言葉で表現する力」の向上を図る。

○オリンピック・パラリンピック教育の推進

コロナ渦で野外での活動や社会体育の制限がある中で、運動機会の確保が急務である。スポーツテストで平均値を下回った種目について、当該の力を伸ばすための手立てを講じていく必要がある。意識面で運動が嫌い・苦手とする児童を減らすための取組を推進する。体験、交流活動については、直接交流型から、動画配信型・ビデオ講演型等への変更を検討する。

○教員の授業力の向上

主幹・主任教諭による教育技術研修会の実施と教科専門指導員の定期指導により、若手教員の基礎指導力を向上させることができた。また、研究授業では、タブレットとZoomを活用した授業づくりに取り組むことで、タブレットやソフトの使用に習熟するとともに、ICT活用授業の様々な方法について研修を深めることができた。「主体的対話的な深い学び」や「授業におけるICTの活用方策」について、さらに研修を深めるとともに、発達段階に応じた指導方法の検討・工夫・改善に一層努める。

○安心して生活できる環境づくりと個別支援教育の充実

研修会を通して、配慮を要する児童への各教員の対応力が向上した。また、個別支援委員会の定期的な実施により、組織的支援のあり方について検討を深めることができた。教育相談や特別支援教育に関する理解の推進に努めてきたが、今後も家庭と一層の連携を図っていくために、情報交換の場や方法をさらに工夫・改善していく必要がある。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R: 令和				
		R1	R2	R3	R4	R5
1	「基礎学力」の確実な定着と「思考力・判断力・表現力」の向上	○	○	○	○	○
2	オリンピック・パラリンピック教育の推進	○	○	○		
3	教員の授業力の向上	○	○	○	○	○
4	安心して生活できる環境づくりと個別支援教育の充実	○	○	○	○	○

5 令和3年度の重点目標

重点的な取組事項－1		「基礎学力」の確実な定着と「思考力・判断力・表現力」の向上							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
一人一人の課題を把握し、補習時間や家庭学習の充実に努め、児童の「基礎学力」の確実な定着と「思考力・判断力・表現力」の向上を図る。		通過率 85%以上		国語 91% 算数 89%		・未定着部分については、補習時間の確保と家庭学習の充実により、理解の促進と繰り返し練習の徹底を図っていく。		○	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象教科 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 継続	朝学習 (本町タイム)	国語・算数	週2回	【指導体制】担任 【内容】・「流暢な読み、書くスピード、計算の速さ・正確さ」の向上、学習に関する基礎的な知識・技能の習得	定着度確認テスト 暗誦検定	確認テストで正答率80%を目標とする。暗誦検定で80%の児童が合格する。	未通過者各クラス3～4名 暗誦検定 今月の詩・百人一首暗誦学年目標達成延べ人数割合72%	低学年、高学年に分けて詩を示したり、学年別に百人一首を示したりすることで、暗誦への意欲が高まった。	○
2 継続	自学ノート	3年生以上(国語・算数、その他の教科)	年間	【指導体制】担任 【方法】・国語、算数のドリルやノートの他に「自学ノート」を統一し、児童が自分で課題を決めて学習に取り組む。	提出状況調査	週1回以上	提出率は学年・学級・時期・働きかけ方によって異なり、達成状況の把握が難しかった。確認方法を今後検討。	優れたノートの紹介やノートコンテストの実施が成果を挙げている。意欲を高める取組を全校で共有する。	○
3 継続	読書活動	全教科	年間	【指導体制】全教職員 【内容】・年4回の読書週間、調べ学習や新聞活用の推進	学校図書館基本計画における目標	目標ごとに80%以上	学校図書館の利用、読書冊数、スクラップやスピーチでの新聞活用については、目標達成。コンクールへの参加数は未達成。	毎年コンクールへ応募することは難しいので、特定の学年で方法を指導し、集中して行うようにするとよい。	○

4 新規	言葉を磨く 芭蕉タイム	国語・学級 活動	年間	【指導体制】担任 【方法】・年2回以上学級句 会、毎月1句俳句の常設掲示、 年2回以上コンクールへ応募	句会回数 掲示句数 応募回数	句会…2回以上 句数…12句 応募…2回以上	句会回数は、目標を十 分達成できなかった。	句会の運営方法につい て、教員研修を実施す る。	○
5 新規	パワーアッ プ教室	国語・算数	夏休み 期間中 学習教 室・水泳 教室が ある日	【指導体制】校長・副校長・ 算数少人数・専科教諭 【方法】・少人数または個別の 指導を行い、つまずきをベー シックドリル等で確認し、解 けなかった問題の解き直しや 補充問題を行う。	確認テスト	確認テストで区 の目標値を達成 する。	7月中は実施。感染症 拡大により、8月の中 止。	参加した児童は、真剣 に学習に取り組んでい た。	△

重点的な取組事項－2

オリンピック・パラリンピック教育の推進

今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
オリンピック・パラリンピック教育を通 して、学力や体力の向上を図るととも に、自国文化理解、国際理解、障がい者 理解を進める中で、他人を思いやる気持 ちや共に助け合って生きようとする態 度を育成する。	○内部評価における肯定的評価が90% を上回る。	・内部評価における肯定的評価は 児童83%、保護者84% ・体力向上については、体力調査 や保護者アンケートの結果から、 一層の取り組みが求められる。	・取り組みを継続させ、 さらに運動に親しむ児 童を増やすとともに、 柔軟性や瞬発力などを 高めるための日常的な 取り組みについて検討 する。	○

B 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
体育的活動等の工 夫・改善に取り組み、 児童一人一人が運動 に意欲的に取り組む ようにする。	○児童アンケート調査 で、運動に意欲的に取 り組むということに 関し肯定的な回答が 90%を上回る。	○体育朝会、体力パワーアッ プタイム、休み時間や放課 後の遊び等の充実を図る。 ○講師招へいによる走り方教 室、なわ跳び教室を実施し て、関心意欲の喚起と基礎 体力の向上を図る。 ○「足立区 beyond2020 マイ ベストプログラム」により、 目標をもった体力向上の取 り組みに挑戦させる。	・児童アンケート肯定的評価86% ・運動月間として毎月のテーマを 設定し、中休み・放課後に運動遊 びに取り組みさせた。 ・2月のマラソン大会に向けて、 道徳授業地区公開講座の講演会で パラマラソン伴走者の講演会を実 施。マラソンを走るためのコツつ いて学び、意欲を高めることがで きた。まん延防止等重点措置に伴 いマラソン大会は中止した。	・「運動が嫌い、運動が 不得意」という児童の 割合を減らすための取 組が必要である。	○

オリンピック・パラリンピックに関する教育に取り組む。	○オリンピック・パラリンピック教育を総合的な学習の時間のひとつの柱として実施する。	○オリンピック・パラリンピック教育全体計画に基づき、指導方法・養う力を明確にした授業を実践する。 ○直接体験・交流に代わる動画配信型・ビデオ講演型等も活用して全学年で体験・交流活動を実施する。	・オリンピック・パラリンピックに関する調べ学習、日本文化・環境に関する学習は、予定通りに行うことができた。 ・観戦は叶わなかったが、全校でフラワーレンプロジェクトに参加し、選手に応援メッセージを送った。 ・パラスポーツ体験は、1・2年ボッチャ、3・4年シッティングバレー、5・6年生ゴールボールを実施した。 ・外国人との交流による国際理解については、新型コロナウイルス感染症拡大により中止。	・「学校 2020 レガシー」として、5つの資質のうち、特に障がい者理解・スポーツ志向・日本人としての自覚と誇りを重点に、今後も取り組みを続けていく。	◎
食育や保健指導の充実を図る。	○各学年で、養護教諭や栄養教諭が、5回以上健康に関する授業を行う。	○養護教諭・栄養教諭が中心になり、食育や健康教育を実施する。 ○SOS教育やがん教育など、新たな課題に関する実践を充実する。	・養護教諭、栄養教諭、栄養士が授業に直接かかわるほか、掲示物の充実など積極的に食育指導や保健指導を行った結果、自らの健康に関心をもつ児童が増加した。 ・保健師によるSOS教育を実施。	・SOS発信の仕方やがん教育など、新たな課題についても指導を充実させていく。	○

重点的な取組事項－3		教員の授業力の向上			
A 今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度	
○J T等を活用し、「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくりに向けての工夫・改善に取り組む。	○内部評価における肯定的な評価が90%を上回る。	保護者アンケートでの十分達成・達成は75%（不明23%） 令和2年度 十分達成・達成は74%（不明21%）	・アンケートの自由記述で課題になった点を改善できるよう次年度に取り組んでいく。	△	
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくりに向けての工夫・改善に取り組む。	○年間10回のOJT研修を実施。 ○若手教員に対して、毎月教科指導専門員による授業指導を実施。	○主幹・主任教諭による教育技術研修会の実施と教科専門指導員の定期指導により、若手教員の基礎指導力を育てる。	・6回の研修を通して、主幹教諭及び主任教諭はメンターとしての力量を高めるとともに、若手教員は必要な指導技術を身に付けることができた。 ・若手教員は、計画に基づき、教材研究を含め、教科指導員の定期的な指導を受けた。	・主体的で対話的な深い学びについて、さらに研修を深める。	○

ICTを活用した分かりやすい授業づくりについて、検討・実践する。	<ul style="list-style-type: none"> ○週3回以上、教員がタブレットを使用 ○月1回以上、児童がタブレットを使用 ○半期に1回以上、プログラミング教育実施 ○校内研修を6回実施 	<ul style="list-style-type: none"> ○ICT活用リーダーを中心に、ICT支援員と連携した校内研修（Zoomの活用）を実施する。 ○ICTを活用した授業の相互参観を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員はほぼ毎日、児童は10月以降、週に2～3回の頻度でタブレット使用。 ・プログラミング教育は、年間計画を基に実施。 ・研究授業では、タブレットの活用を意識した授業づくりに取り組んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度、育てたい児童像、教員の授業改善の視点で、更なる活用の手立てを探る。 	○
----------------------------------	--	---	---	--	---

重点的な取組事項－4		安心して生活できる環境づくりと個別支援教育の充実			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
いじめ・不登校への迅速・的確な対応を進めるとともに、学習面・行動面で配慮を要する児童への対応・体制の工夫、改善を進め、個別支援教育の一層の充実を図る。		○内部評価における肯定的な評価が90%を上回る。	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートによる十分達成・達成は85%（不明11%） 令和2年度 十分達成・達成は78%（不明15%） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「分からない」の回答が11%あった。取り組みに関する積極的な発信が必要である。 ・さらに発信の機会を工夫して、より多くの家庭が教育相談や特別支援教育の体制や具体的な取り組みについて理解できるようにしていく。 	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
いじめの根絶と不登校の早期解消に努める。	○学年末の段階でいじめ・不登校の解消率を100%にする。	<ul style="list-style-type: none"> ○年3回のアンケート調査と迅速かつ丁寧な聞き取り・継続指導の実施。 ○パンダポスト（相談箱）の有効活用。 ○担任とコーディネーター、特別支援教育コーディネーター、カウンセラー、SSWの連携による不登校支援。 	<ul style="list-style-type: none"> ・解消率100%には至らなかった。 ・保護者アンケートで関連項目「問題や悩み、トラブルを見逃さずに対応」の十分達成・達成が85%である。令和2年度に比べて、6%向上した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員一人一人の児童理解・教育相談に関する力量を高めるための取組を一層推進する。 	○

<p>学習面・行動面で配慮を要する児童への対応・体制を工夫・改善・充実させるとともに、研修を通して教員の指導力を高める。</p>	<p>○配慮を要する児童への対応についての研修会を年間3回実施する。</p>	<p>○配慮を要する児童のニーズや一人一人を伸ばす指導について研修を行い、共通認識のもと、組織的な指導が進められるようにする。</p> <p>○個別の支援に当たっては、通級指導学級教員との連携により、効果的な指導方法と個別の指導機会の充実を図る。</p>	<p>・学校生活支援シートの見直しと配慮を要する児童への対応についての研修は、予定通り実施することができ、対応の改善が図られた。</p>	<p>・関連機関との連携も積極的に行うことができた。今後も、継続して連携していきたい。</p>	<p>○</p>
<p>個別に支援が必要な児童に対して、全教員の共通理解のもと効果的な指導が展開できるようにする。</p>	<p>○個別支援にかかわる情報交換を月1回以上実施する。</p>	<p>○担当教員・専門員・コーディネーター・カウンセラーの密接な連携により、効果的な指導方法と個別の指導機会の充実を図る。</p>	<p>・個別支援委員会を定期的開催することで情報交換が図られ、通級児童の学習や生活に成長が見られた。</p>	<p>・引き続き情報交換を密にし、学級教室でもニーズにあった効果的な指導ができるようにする。</p>	<p>◎</p>

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

重点的な取組事項－1 「基礎学力」の確実な定着と「思考力・判断力・表現力」の向上

- 区学力調査では、各学年の平均正答率は、区の目標値をすべての学年で上回った。通過率は、国語 91%、算数 89%で目標を上回った。しかしながら、3月の定着度確認テストでは、国語 85%、算数 79%で、算数が目標を下回った。新学年に向け、一人一人の未定着部分についてフォローする。
- ノート指導の徹底を図ることで、思考力・表現力の向上に繋げることができた。「話して書いて伝え合う授業」を目指しているが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、ペア・グループなど多様な話し合いの機会は十分に確保することができなかった。
- タブレットの導入により、アプリの活用で意欲的にグループでの検討に参加する姿が見られた。
- ◆「言葉で考える力」、「言葉で表現する力」の向上のために、語彙の拡張を図るための指導方法の開発や家庭学習の見直しを図っていく。また、ICTの活用について一層の工夫を図る。

重点的な取組事項－2 オリンピック・パラリンピック教育の推進

- オリンピック・パラリンピックに関する調べ学習、日本文化・環境に関する学習は、予定通りに行うことができた。
- これまでアワード校として推進してきた「パラスポーツ体験による障がい者理解」は、1・2年ボッチャ、3・4年シッティングバレー、5・6年生ゴールボールを実施することができた。
- 毎月の運動月間としてテーマを設定し、休み時間や本町タイムにおける体育的活動、校内マラソン大会なども取り入れて運動の機会を増やした。
- 各学年において食育・保健指導を実施し、児童の健康に関する意識が高まった。
- ◆コロナ渦で野外での活動や社会体育の制限がある中で、運動機会の確保が急務である。スポーツテストで平均値を下回った種目について、当該の力を伸ばすための手立てを講じていく必要がある。意識面で運動が嫌い・苦手とする児童を減らすための取組を推進する。
- ◆外国人との交流による国際理解については、実施することができなかった。体験、交流活動については、直接交流型から、動画配信型・ビデオ講演型等の活用も検討する。

重点的な取組事項－3 教員の授業力の向上

- 主幹・主任教諭による教育技術研修会の実施と教科専門指導員の定期指導により、若手教員の基礎指導力を向上させることができた。
- 研究授業では、タブレットを活用した授業づくりに取り組むことで、タブレットやアプリケーションの使用に習熟するとともに、ICT活用授業の様々な方法について研修を深めることができた。
- ◆「主体的で対話的な深い学び」や「授業におけるICTの活用方策」について、さらに研修を深めるとともに、発達段階に応じた指導方法の検討・工夫・改善に一層努める。

重点的な取組事項－4 安心して生活できる環境づくりと個別支援教育の充実

- 特別支援コーディネーターを中心に、スクールカウンセラーや特別支援教室アドバイザー、スクールソーシャルワーカーの助言を受け、全校体制での取り組みが確実に充実してきた。
- 研修会を通して、配慮を要する児童への各教員の対応力が向上した。また、個別支援委員会の定期的な実施により、組織的支援のあり方について検討を深めることができた。
- ◆教育相談や特別支援教育に関する理解の推進に努めてきたが、今後も家庭と一層の連携を図っていくために、情報交換の場や方法をさらに工夫・改善していく必要がある。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

昨年度に続き、新型コロナウイルス感染症の動向により、年度当初の年間計画の変更や、その時々で状況で行事の実施の可否を決めざるを得ない状況が多くあった1年でした。

特に、夏休み直後の9月は2週間の休校から、その後は、登校・リモートの選択となり、リモートを選択した児童は、家庭で教室の授業の様子を見ながら学習する、初めての体験をしました。ICTの活用については、文部科学省がGIGAスクール構想として、直近で進めようとしていた事業であり、一人1台のタブレット配置はその構想に基づくものです。コロナ禍で機材面での整備が一挙に進みましたが、これからの時代を担う子供たちがICTとどう向き合い、活用し、自分たちの生活に役立てていけるか、当面の大きな教育課題です。教員の研修も重ねて、確かな学力向上につながるICT活用と情報教育を推進していきます。

そのような事態の中、一番影響を受けているのが、児童の豊かな心を育む、体験活動や学校行事を中心とする特別活動の実施です。本年度の音楽会は特別な形での開催となりましたが、それぞれに自分のめあてをもって主体的に取り組んだ音楽会は、一人一人にひとつの目標を成し遂げた満足感をもたらしました。

学校評価の児童アンケートから見えてくるのは、このような閉塞的な社会状況の中で、学校でも子供たちにとっては窮屈な生活様式が求められているにもかかわらず、子供たちはそれを受け止めて、「この時期にできることをできる限りやっていきたい」と考え、しっかりルールを守りながら生活している姿です。「学校へ行くのが楽しい」「学校の行事は楽しい」の項目で「すごく楽しい」の割合は、昨年度に比べて若干下回るものの、「楽しい」まで含めると9割以上の子供たちが肯定的な評価をしています。様々な制限があるとはいえ、せめてもの救いです。

まだ、事態が収束する状況ではありませんが、子供たちの更なる成長に向けて、ご家庭の協力と地域の皆様のご支援を引き続きお願いいたします。

(3) その他（学校教育活動全般について）

新しい学校の生活様式のもと、本校の教育目標「つよく かしこく あたたかく」を目指して、児童は日々の学習の積み重ねと4つ「あ」あいさつ、あつまり、あとかたづけ、あたたかいことばに加えて、2つの「あ」安心、安全を心がける生活に取り組み、それぞれに成果を挙げることができました。できないことを残念に思うことなく、できることをできるときに楽しめるように、また児童の意欲をさらに高め、力を伸ばしていけるように、これまで以上に教職員一人一人が自己研鑽に励み、教師としての力を伸ばしていけるよう努めてまいります。